

創刊の辞

ここに創刊する『*Scientia – Journal of Modern Western Philosophy*』は、従来、京都大学文学研究科・西洋哲学史（近世）専修が発行主体となってきた二つの雑誌『近世哲学研究』と『*Prolegomena*』の志を継ぎながら、それらをさらに発展させることを目指している。先行両誌は、一方は同専修を担われてきた先生方とすでに名だたる研究者となられたその修了者の諸先輩方を主な書き手として、また他方は在籍中の大学院生たちがその清新たる研究を世に問う媒体としてその役割を果たしてきた。本誌もまた、近世・近代哲学研究を深化させ、刷新してゆくというこの先行両誌が果たしてきた役割を担おうとしている。しかしまた本誌がめざすのは、ただたんに両誌の継承というわけではない。本誌はこの二誌が持っていた射程を超えて近世・近代哲学研究を中心とした新しい知 *Scientia* の場を形成しようとするものでもある。

近世・近代の西洋哲学を研究する我々にとって第一の任務は、テキストを読み、解釈し、それを世に問うという営みを継続していくこと、この継続を通じて西洋哲学史研究をさらに発展させてゆくことである。昨今の、高等教育政策並びに科学技術政策は、こうした研究をいわゆる訓詁学として無用の長物とみなす傾向がある。しかし、大げさなもの言いがゆるされるならば、人類がこれまでに蓄積してきたテキストの集積はその知恵の集積であり、一時的な時代の気分などによって投げ捨てられるべきものではない。そして、この蓄積はそれを読み、解釈し、そこに記された思想を我がものとする存在がなければ、それこそ無用の長物と化するのである。

とはいえ、そうした人類の蓄積に対して我々が貢献できることはあまりにも小さい。西洋という限定は、地域的にも極めて限定されたものであり、哲学というジャンルもまた文化の広大な領域を前にしてはわずかな部分を指すにすぎない。また、「西洋近世・近代哲学」と名指されるものの範囲の中でも我々が関与することが出来るのはその一部にとどまろう。しかし、文化という広大な蓄積を前にして、我々はそうした小さな一歩一歩を積み重ねていくことしかできないのである。近世・近代だけでなく、古代や中世について、西洋だけでなく東洋といった他の地域について、そして哲学以外の分野においてさらなる同志のあることを確信して我々はここに小さな一歩を記す。

しかしまた、本誌の対象は、いわゆる「西洋近世・近代哲学研究」という表現が思い起こさせるものよりも、さらに広い対象を含むものとなるだろう。まさにそこに、新たに本誌を創刊する意義がある。そもそも現代においてこのディスシプリンが持つ地域的・ジェンダー的バイアスについて無自覚、無反省に、この標識の下にとどまり続けることはもはや許されていない。そうした自己反省の営みそのもの

も、また「西洋哲学史研究」の一部でなければならない。さらに、上記のように本誌の立場は訓詁学的研究の価値を否定するものではないが、テキスト研究がそれにとどまらない射程を持つときには、むしろそれを歓迎するものである。したがって、隣接する現代哲学や古代・中世の哲学、文学、歴史、さらには社会科学、自然科学をも含めた広大な知の領域と、西洋近世・近代哲学との生産的な接触の場であることもまた本誌に期待される。

その意味では、この創刊号に、ミュンスター大学のミヒャエル・クヴァンテ氏とオスナブリュック応用科学大学のジルヴィア・ヴィーデブッシュ氏が共著論文を寄せてくださったことは望外の喜びである。このヘーゲル研究者と発達心理学者による論文は、まさに本誌の考える哲学史研究の隣接分野との共同の一つの好例を提供するものといえよう。

本誌が、知らないし学、*Scientia* の礎とはいわないまでも、まずはその倒壊を支えるひとつの添え木とならんことを願って、創刊の辞とする。

2021年3月24日

大河内泰樹